

「山々が移り、丘が揺らごうとも 私の慈しみはあなたから移らず

私の平和の契約は揺らぐことはない —あなたを憐れむ主は言われる。」

(イザヤ 54 章 10 節 聖書協会共同訳)

日本聖公会宣教 160 周年を迎えて

日本聖公会につらなるすべての皆さまに主の平和がありますようお祈りいたします。

日本聖公会は 2009 年に宣教 150 周年を迎え、多くの皆さまと共に記念礼拝を献げ、これまでに与えられた大きな恵みを主に感謝し、宣教への思いを新たにいたしました。それから 10 年が経過し、今年が日本聖公会宣教 160 周年となります。

この 10 年を振り返ってみますと、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起こり、津波や東京電力福島第一原子力発電所事故により、多くの方々が犠牲となりまた避難を余儀なくされ、9 年目を迎えた今もなお困難な状況におかれています。その後も熊本地震、九州北部豪雨、西日本豪雨、北海道胆振東部地震など各地で自然災害が相次ぎました。東日本大震災では被災者支援活動として「いっしょに歩こう プロジェクト」が全国また全世界の皆さんの祈りと協力によって始められ、その活動を通して様々な気づきが与えられました。また福島第一原子力発電所事故と周辺地域の放射能汚染は、わたしたちのライフスタイルそのものが問われる出来事でした。そして未来に大きな負債を残す出来事になってしまいました。

こうした体験を踏まえつつ、2012 年には「いのち、尊厳限りないもの」をテーマに日本聖公会宣教協議会が開催され、「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」が出されました。信徒の高齢化、信徒数の減少、教役者不足、財政の逼迫など、さまざまな課題を抱えながらも、信徒、教役者が主体的に丁寧な宣教・牧会を心掛けることを決めました。また 2012 年に開催された第 59 (定期) 総会では「日本聖公会ハラスメント防止宣言」が可決され、その後ハラスメント防止・対策担当者も置かれ、各教区の担当者と連携しつつ、研修会などに取り組んでいます。そこに集う誰もがその尊厳を尊ばれる共同体となることは教会にとって大切な課題です。翌年には第 2 回世界聖公会平和協議会が沖縄で開催され、沖縄の人びとや朝鮮半島の統一のために働く人々の声に耳を傾け、世界の聖公会が正義と恒久平和の働きに連帯することを呼びかけました。

2014 年には日韓宣教協働 30 周年記念大会が韓国済州島で開催され、日韓両聖公会が東アジアの平和のために、宣教協働を継続していくことが確認され、青年や女性たちの交流などが行われています。また大韓聖公会から宣教協働者として日本聖公会で働く司祭たちのなかから、任期終了後も教区籍を移して各教区で働く方がおられることは感謝です。2016 年に開催された第 62 (定期) 総会では、「ハンセン病回復者と家族のみなさまへの謝罪声明」が決議され、国の隔離政策を黙認・支持したことによって人間としての尊厳を奪われた皆さまに謝罪し、今もなお続く偏見・差別をなくす啓発活動、また高齢化が進む療養所内教会の信徒への牧会、また交流を大切にすることを約束しました。またこの総会では祈祷書改正委員会設置が承認され、これからの時代にふさわしい祈祷書を編纂・発行するために作業が続けられており、これからの礼拝の充実が期待されます。

2018年に開催された第64（定期）総会では、「日本聖公会祈祷書によって聖職按手を受領した者の聖職位は有効性を保持していることを認識する」ことを原則とする「女性の司祭按手に関するガイドライン」が可決されました。日本聖公会で最初の女性の司祭按手が行われてから20年を迎えた昨年12月には女性の司祭按手20周年感謝礼拝が行われましたが、性の違いを超えた協働がますます期待されます。全国青年大会、日韓青年セミナー、U26など青年たちの活動は継続され、教区、管区を超えた豊かな出会いと気づきが与えられています。

同時にこの10年間で聖職者数や信徒数はさらに減少しています。特に聖職者数の減少は深刻であり、今後の各教区の在り方にも関わる課題です。こうした現状を踏まえ主教会では2022年に開催予定の日本聖公会宣教協議会に向けて、神学教育担当者養成の課題をも含め日本聖公会の宣教体制の見直しを検討し始めています。これまで度々議論されながらも維持されてきた現在の11教区制について、より積極的な意味での宣教体制の立て直しとして、その統合・再編成の議論を推し進めることも主教会に託された課題であると考えています。

日本の社会では高齢化が進み、経済格差がさらに広がり、ナショナリズム的傾向が強まり、少数者の人権侵害が深刻になっています。また沖縄の米軍基地を固定化させ、戦争放棄を謳った憲法9条の改定など日本の再軍事化を加速しようとする動きも顕著です。また絶えることのない痛みと分裂を体験する世界のなかで、わたしたちが果たすべき使命を再確認したいと思います。

日本聖公会宣教150周年記念 主教会教書では「礼拝が『レイトウルギア』（人々の業）と言われるように、教会は何よりも『神の民』の共同体です。キリストの福音と愛を伝える器として召されたわたしたちは、どこにあっても、教会の礼拝に集められ、み言葉と聖餐によって養われ、この社会に派遣されていきます。信徒の働きと参加は聖職の働きと同様に大切であり、教会は自分自身のためだけではなく、特に社会の中で小さくされている人々の中に神様の臨在と働きを見出し、奉仕する使命を持っています。これらの働きは聖公会のみならず、教派を超えた教会間の対話と宣教協力によってなされるものでもあります。」とあります。

また2012年に開催された日本聖公会宣教協議会の「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」では、「日本聖公会が新しい共同体となるために、わたしたちは過去の歩みを謙虚に省み、神への信頼と希望をもって歩みだします。キリストの救いと喜びをこの世に現すため、またサクラメントをとおして与えられる神の恵みに多くの人びとを招くために、み言葉と礼拝への思いを深め、ともに祈ります。教会は、特に癒しと解放を求める人びとに心を通わせ、一人ひとりの＜いのち＞を宝とし、地域（パリッシュ）そしてすべての被造物とともに主の救いに与ることを願います。」とあります。

主から託された和解と平和の使命を果たす思いを新たにしたいものです。ユダヤ人を恐れて家の中に閉じこもっていた使徒たちは、聖霊を受けた後この世へと送り出され、大胆に福音を語り始めました。日本聖公会に連なるわたしたちは、使徒たちに注がれたのと同じ聖霊に満たされ、慈しみと憐れみの神に信頼し、それぞれの場において主から託された使命を果たしてまいりましょう。

2019年6月9日 聖霊降臨日

日本聖公会 主教会